

授業概要

専門演習ではグループ毎に自由にテーマを選択し、研究を実際に協同して行いながら、1.文献検索等の情報収集方法、2.保育・幼児教育分野に適した社会調査法、3.学術論文および報告書の作成方法、4.プレゼンテーションの方法等から、卒業論文作成に必要な方法論を体系的に学んで行く。また、その過程における文献レビューやディスカッション等を通じて、興味を持っている分野について科学的な視点で改めて向き合うことで、より具体的なテーマを発見し、卒業論文演習へ繋げていくことを目的とする。

授業計画

第 1 回	オリエンテーション	第 16 回 ～ 第 19 回	定性的調査の講義と演習：グループインタビューをしてみよう！
第 2 回 ～ 第 3 回	興味がある分野やテーマの確認(現状で把握している情報に対する考察)	第 20 回 ～ 第 21 回	データ解析の方法(文章のまとめ方、グラフや表の書き方)
第 4 回 ～ 第 5 回	文献の検索方法および読み方	第 22 回 ～ 第 24 回	全体研究報告書の作成とプレゼンテーション
第 6 回 ～ 第 7 回	定量的調査方法が用いられた文献レビューとディスカッション	第 25 回 ～ 第 27 回	卒業論文に向けた研究計画の立案
第 8 回 ～ 第 9 回	定性的調査方法が用いられた文献レビューとディスカッション	第 28 回 ～ 第 29 回	研究計画の発表
第 10 回 ～ 第 14 回	定量的調査の講義と演習：アンケートをしてみよう！	第 30 回	秋期まとめ
第 15 回	春期まとめ		

到達目標

幼児教育分野における科学的なリテラシーを涵養しながら、卒業論文にむけたテーマを発見し、研究計画を立案する。

履修上の注意

- ・ 討論・演習において主体的に取り組める学生の履修を望む。
- ・ 原則として毎回出席すること。遅刻・欠席の場合は都度対処するので必ず連絡すること。
- ・ 授業内における一人ひとりの発言は貴重な情報である。どの様な内容であっても互いに否定的に捉えないことをルールとする。
- ・ 文献レビューの準備等、授業外での課題にも積極的に取り組むこと。

予習・復習

事業時間外での課題を複数回課す。

評価方法

出席、講義内の討論における積極性、文献レビュー等の課題から総合的に判断する

テキスト

特に指定しない。必要となる文献等については適宜授業内で告知する。

授業概要

小学校教員を目指す人を対象に、授業を行うための基礎的な事項を学ぶ。

テキストを読み進める（各自は予習として各章ごとに通読をし、そこにある課題を必ずやってくるという反転授業の形式で行う）と共に、次時にはそれに関連する具体的な課題を取り上げ、全員で議論をしながら演習を進める。

授業計画

第 1 回	オリエンテーション	第 16 回	目標・指導・評価—子どもは学んだ？
第 2 回	よい授業とは	第 17 回	評価の方法—学びをどう捉える？
第 3 回	「木曾呂」を学ぼう	第 18 回	教師は何をしている？
第 4 回	学んだ事を仲間に伝えよう	第 19 回	教師の振る舞いのねらいを探ろう
第 5 回	分かりやすく伝えるには	第 20 回	学習意欲を高める ARCS モデル
第 6 回	学ぶとは知ることか	第 21 回	学習意欲を高める動機付け
第 7 回	学ぶとはできるようになることか	第 22 回	協同的な学びとは
第 8 回	一人で学べるのか—その方策は	第 23 回	協働的な学びをデザインする
第 9 回	教師の仕事とは	第 24 回	社会の情報化
第 10 回	インストラクショナルデザインとは	第 25 回	情報社会に適應するには
第 11 回	授業の構想—学習目標を明確にする	第 26 回	授業を分析するとは
第 12 回	教材研究の方法—何を教える？	第 27 回	授業を分析する
第 13 回	教材研究の方法—どう教える？	第 28 回	学び続ける教師の条件
第 14 回	学習指導案—どう教える？	第 29 回	学び続ける教師を目指す
第 15 回	学習指導案を書いてみよう	第 30 回	演習のまとめ

到達目標

- ① 教師の仕事について、教師の立場から重要点を、具体的な事例をもとに説明することができる。
- ② 子どもの学びについて、配慮すべき事柄を、いくつかの事例をあげて、説明することができる。
- ③ 演習を通して、アクティブ・ラーニングのよさを体得し、主体的に学ぶ態度を形成する。

履修上の注意

- ① 次時までには、必ずテキストを読み、章末にある課題をやってくるのが求められる。
- ② 原則、遅刻は認めない。
- ③ 他者の考え方をよく聴き、それにもとづき自分自身の考えを持つ（変容する）ようにし、それを他者に伝達する努力が求められる。

予習・復習

- ① テキストの指定された箇所（章）を、次時までには読み、まとめ、そこにある課題を行ってくる。
- ② ①が済んでいる（できている）という前提で、演習は行われる。

評価方法

- ① 予習（反転授業）の有無やその成果（30%）、演習での討議への参加度（40%）、レポート等（30%）を総合的に評価する。

テキスト

- ・教科書名：『授業設計マニュアル Ver.2—教師のためのインストラクショナルデザイナー』
- ・著者名：稲垣 忠・鈴木 克明
- ・出版社名：北大路書房
- ・出版年：2015年2月

授業概要

教育者として、子どもの行動や心の成長・発達とその形成要因について理解し解決に向けて取り組むことは重要である。本演習では子どもの心理的变化を理解するために、子どもの家庭を中心とした環境の様子を知ることにより子どもについて理解を広げ、保育・教育や指導にも役立てることができるようする。そのために家庭と子どもの成長を把握するために関連するDVDを見ると同時に心理検査の活用も行う。また、関連する資料や文献などの検討を行う。このような取り組みを通して学びを深めて卒業論文作成につなげていく。

授業計画

第 1 回	ガイダンス（春期のねらいと方針）	第 16 回	ガイダンス（秋期のねらいと方針）
第 2 回	子どもの理解に向けて	第 17 回	家庭・教育環境と子どもの問題行動
第 3 回	子どもの心理的発達①子どもの誕生	第 18 回	家庭・教育環境と子どもの社会性
第 4 回	子どもの心理的発達②子どもの成長と家族	第 19 回	家庭・教育環境と子どもの対人関係能力
第 5 回	家族の関わり① 子どもの世界の変化	第 20 回	家庭・教育環境と子どもの研究発表①
第 6 回	家族の関わり② 家族の発達の变化	第 21 回	家庭・教育環境と子どもの研究発表②
第 7 回	子どもの心理的発達と父親・母親の影響	第 22 回	家庭・教育環境と子どもの研究発表③
第 8 回	父親の役割と実態	第 23 回	家庭・教育環境と子どもの研究発表④
第 9 回	父親① 父親の子育てと子どもの成長・発達	第 24 回	各自の研究成果報告と意見交換①
第 10 回	父親② 母親の子育てに及ぼす影響	第 25 回	各自の研究成果報告と意見交換②
第 11 回	父親③ 父親と家族の変化	第 26 回	各自の研究成果報告と意見交換③
第 12 回	夫婦①夫婦関係と子どもの心理的発達	第 27 回	各自の研究成果報告と意見交換④
第 13 回	夫婦②夫婦関係と家族の変化	第 28 回	卒業論文に向けた研究計画の立案①
第 14 回	夫婦③夫婦関係と児童虐待	第 29 回	卒業論文に向けた研究計画の立案②
第 15 回	学外授業を通してのまとめ	第 30 回	まとめ
		第 31 回	試験

到達目標

1. 子どもの成長・発達に及ぼす父親と母親、夫婦関係の影響について理解する。
2. 保育・教育者として家庭を含めた環境の重要性について理解を深め、保育・教育の可能性について視点を広げる。また、保育士・教育者として子どもへの関わり方を理解する。
3. 自己の取り組む卒論の位置づけを明確にする。
4. 卒論の内容についての構成と見通しを持つ。

履修上の注意

- ①毎回話題が発展していくので、休まずに出席すること。
- ②関心のあることを更に自分で調べ、理解を深めるように積極的に参加すること。
- ③毎回行われる内容についてわからないことがあるときは、その場で質問すること。
- ④第 20 回～第 27 回は学生が主体となって発表するので、積極的な関心と責任を持って参加すること。

予習・復習

シラバスに基づいて演習が進行するので、事前に目を通し場合によっては調べること。特に、内容によっては文献が少ないので、最大限努力して文献・資料を探すこと。

評価方法

演習への取り組み(積極性)、レポートなどを加味して総合的に評価する。

テキスト

特に指定しないが、その都度必要なものを紹介する。

授業概要

本ゼミナールでは、「子どもの健康」をキーワードとして、卒業論文を書くための研究を進めていきます。また、同時に保育に関する基本的な技術、能力を高め、実習、就職へとつなげていくことのできる能力を身につけていくことを目的とした演習を展開していく予定です。

授業計画

第 1 回	オリエンテーション	第 16 回	オリエンテーション
第 2 回	レポート①～作成	第 17 回	レポート③～作成
第 3 回	レポート①～発表	第 18 回	レポート③～発表
第 4 回	レポート①～発表	第 19 回	レポート③～発表
第 5 回	レポート②～作成	第 20 回	研究テーマ①
第 6 回	レポート②～発表	第 21 回	研究テーマ②
第 7 回	レポート②～発表	第 22 回	文献の探し方①
第 8 回	保育実践研究①	第 23 回	文献の探し方②
第 9 回	保育実践研究②	第 24 回	卒論研究①
第 10 回	保育実践研究③	第 25 回	卒論研究②
第 11 回	保育実践研究④	第 26 回	卒論研究③
第 12 回	保育実践研究⑤	第 27 回	卒論研究④
第 13 回	保育実践研究⑥	第 28 回	卒論研究⑤
第 14 回	保育実践研究⑦	第 29 回	研究結果発表
第 15 回	まとめ	第 30 回	まとめ

到達目標

- ・グループで協力しながら、課題に取り組むことができる。
- ・卒業論文のテーマを決めることができる。

履修上の注意

グループ学習、発表などがあるので、協調性が必要となります。

発表のための練習等により、時間外での活動が必要になってくる可能性があります。その際にも、「協調性を最重視し、アルバイトなど自己都合をできる限り変更することができる学生の履修を望みます。

- ① ゼミ合宿や保育所での学外研修を行うことがあります。
実施することになれば、日程を調整しますので、必ず参加してください。また、費用がかかりますので、準備をしてください。
- ② 卒業論文の研究テーマは、私の研究分野（体育学—発育発達）を中心とした内容に限られます。ある程度、卒論テーマをイメージした上で、ゼミを選択するようにしてください。
- ③ パソコンを使った授業を行います。
基本的に授業内で課題を指示します。授業内で終わらなかった課題については、復習をかねて授業時間外で学習してもらいます。

予習・復習

事前に配布した資料を読んでくる。また、復習用の課題を出すので、次週までに提出する。

評価方法

発表内容、研究内容と意欲的に学ぼうとする態度を総合的に評価します。

テキスト

特に、指定しない。

授業概要

「子ども」「家族」「社会」について、社会学、ジェンダー学の視点から考えていきます。毎回、仲間とともに文献を読みそれについて議論する、その積み重ねのなかで自分が「本当に」やりたいと思う卒論テーマを見つけることができます。また、論文執筆に必要な知識や態度、マナーやルールを身につけることができます。現 4 年生が取り組んでいる卒論タイトルは以下の通りです。

「教育のなかで性別をどう扱うか」「戦争孤児はどのように生き延びたのか」「子ども虐待と親」「子どもの積極性はどう育つのか」「デート DV の問題性と発生要因」「母親の育児ストレス」「日本における多文化保育」

授業計画

第 1 回	オリエンテーション ゼミの進め方	第 16 回	研究の進め方
第 2 回	論文を執筆するための心得	第 17 回	問題関心のありか
第 3 回	研究を進めるための心得	第 18 回	研究課題の検討
第 4 回	記事検索と資料の調べ方	第 19 回	先行研究の調べ方
第 5 回	文献の読み解き方と報告のやり方	第 20 回	先行調査の調べ方
第 6 回	文献講読と議論 1	第 21 回	参考文献リストの作成
第 7 回	文献講読と議論 2	第 22 回	研究方法の検討
第 8 回	文献講読と議論 3	第 23 回	分析方法の検討
第 9 回	文献講読と議論 4	第 24 回	研究計画の報告 1
第 10 回	文献講読と議論 5	第 25 回	研究計画の報告 2
第 11 回	文献講読と議論 6	第 26 回	研究計画の報告 3
第 12 回	グループディスカッション	第 27 回	研究計画の報告 4
第 13 回	関心あるテーマへのアプローチ 1	第 28 回	研究計画の報告 5
第 14 回	関心あるテーマへのアプローチ 2	第 29 回	全体討論
第 15 回	後期に向けて	第 30 回	4 年次の卒論演習に向けて

到達目標

文献を読み解く力を身につける。
 研究をすすめていくために必要な知識や態度、マナーやルールを身につける。
 仲間と議論することで自らの考えを鍛える。
 議論をとおして相手の考えを理解する。
 自らの問題関心を深め、卒業論文のテーマを決める。

履修上の注意

報告や課題に積極的に取り組む態度が求められる。
 議論に活発に参加することが求められる。
 仲間の意見を尊重し、自分の意見もしっかりと伝えるコミュニケーション能力が求められる。

評価方法

出席は当然重要である。
 そのうえで、ゼミでの報告態度や報告内容、議論への参加態度、課題レポート等で、総合的に判断する。

テキスト

とりあげる文献については、ゼミ生と相談のうえ、初回のゼミで決める。

授業概要

保育者として子どもたちに豊かな音楽体験を提供できるようになるためには、実際の体験を通して音楽的視野を広げ、自己の音楽的感性を養い音楽的技能を高めることが必要である。3年次には、篠笛、三味線など和楽器の体験や長唄を唄うなどの表現活動を通して日本の伝統的な音楽に親しみ、大学祭で練習成果を発表する。卒業研究は子どもと音楽に関わる内容の研究、または卒業演奏として作品研究と演奏発表をする。題目例「小学校の歌唱共通教材から消えた歌唱曲の復活」「三味線に親しもうー小学校教育における総合的学習活動の中で」「わらべうたがもたらす子どもへの影響」

授業計画

第 1 回	ガイダンス	第 16 回	和楽器を用いた合奏1 佃の合方
第 2 回	篠笛の奏法1 音の出し方・基本姿勢	第 17 回	和楽器を用いた合奏2 ペア練習
第 3 回	篠笛の奏法2 五・六・七を使って	第 18 回	発表会
第 4 回	篠笛の奏法3 甲音	第 19 回	保育現場における表現活動 パネルシアター作成
第 5 回	篠笛合奏1 ほたるこい等	第 20 回	パネルシアターの音楽検討
第 6 回	篠笛合奏2 締太鼓の奏法	第 21 回	パネルシアターの音楽練習
第 7 回	篠笛合奏3 鉦の奏法	第 22 回	パネルシアター部分練習
第 8 回	三味線の奏法1 各部の名称、準備	第 23 回	パネルシアター通し練習
第 9 回	三味線の奏法2 構え方・基本姿勢	第 24 回	参考書物による研究の方法
第 10 回	三味線の奏法3 撥の持ち方	第 25 回	卒業研究参考文献について
第 11 回	三味線の奏法4 調弦について	第 26 回	参考論文等の調べ方
第 12 回	三味線の奏法5 基本練習	第 27 回	レジュメ作成について
第 13 回	長唄1 馬の合方前半	第 28 回	課題別グループワーク
第 14 回	長唄2 馬の合方後半	第 29 回	グループ別課題発表
第 15 回	実技試験	第 30 回	まとめ

到達目標

篠笛、三味線など和楽器の基本的な奏法を身につけ、平易な曲を演奏できるようになる。子どもたちが豊かな音楽体験ができるような表現活動の指導についての工夫ができる。

履修上の注意

歌を歌うことや演奏すること、そして工夫することが好きであること。
目的意識を持って積極的に取り組み、自己課題は責任を持ってやりとげること。
文献研究やレポート作成などに関心を持って取り組むこと。
学外活動を行う場合があり、それに伴い多少の経費がかかることもある。

予習復習

課題となる曲の自己練習を必ず行うこと。

評価方法

出席状況 10%、課題への取り組み 20%、レポート作成 20%、発表会での演奏 50%総合して評価する。

テキスト

楽譜、資料を配布する。また、必要に応じて指示する。

授業概要

教育の現場では、植物園や動物園、科学館などの社会教育施設の利用を伴う活動が近年多く見られる。その際、教師はこれらの施設の学習プログラムを単にそのまま利用するのではなく、十分な事前学習と周到な計画・立案を行った上で依頼する必要がある。本演習の前半は、こうした観点から、県内および近県の社会教育施設等を取り上げ、理科教育・環境教育に関連した学習プログラムを実際に作成・提案することを通して、将来的な各種教育現場での実践力を身につけることを目標とする。

後半は、理科教育・環境教育に関する最新の情報を得る目的から、学会誌や専門書の輪読、科学実験を行う。これらを通して、さまざまな理科教育・環境教育分野の潮流と諸問題について検討を行い、卒業論文の土台づくりとしたい。

授業計画

第 1 回	前半オリエンテーション	第 16 回	後半オリエンテーション
第 2 回	環境と人間	第 17 回	理科教育・環境教育論文とは、発表の順番等の決定
第 3 回	理科教育・環境教育とは	第 18 回	発表の技法、資料の作り方
第 4 回	環境保全・環境創造と理科教育・環境教育	第 19 回～ 第 29 回	論文紹介・解説のプレゼンテーションと討議、卒論にむけて
第 5 回～ 第 6 回	学校教育現場における環境教育 ※学外活動		
第 7 回～ 第 8 回	社会教育施設の見学のための準備、計画		
第 9 回～ 第 10 回	社会教育施設の見学、資料収集 ※学外活動		
第 11 回～ 第 12 回	社会教育施設を利用した学習プログラムの作成		
第 13 回～ 第 14 回	学習プログラム提案のプレゼンテーションと討議		
第 15 回	前半まとめ		

到達目標

- ・社会教育施設等を用いた理科教育・環境教育に関連する学習プログラムの作成・提案を行うことができる。
- ・学術論文の内容や構成について要旨を作成して説明することができる。
- ・卒業論文のテーマの方向性を決定できる。

履修上の注意

本演習は、4年生の卒業論文につながるものであるため、卒業論文を理科や環境教育に係わる内容で作成しようという学生であること。

授業を土日に振り替えて、社会教育施設や小中学校の授業観察に行く予定である。したがって、指定した校外学習日に必ず出席すること。

班ごとの活動や個人発表が多くなるので、欠席しないことが前提になる。遅刻3回で欠席1回として扱う。また、20分以上の遅刻は欠席として扱う。

予習復習

本演習の単位修得には、プレゼンテーションや個人レポート作成のために授業以外の自主学習（予習）が必要となる。また、卒論に向けた活動ともなるので、授業内で得た知識を復習することも必要となる。

評価方法

授業中の態度や参加状況（30%）、プレゼンテーションへの取り組みと発表内容（40%）、個人レポートなどの提出物（30%）によって総合的に判断する。

自身のプレゼンテーションを欠席した場合、授業に無断で欠席した場合は評価の対象とはしないので十分注意すること。

テキスト

適宜印刷資料を配付する。

授業概要

本演習は、卒業論文執筆に向けて研究の作法について学ぶことを目的とする。研究や学問とは、知の共有財産（公共財）を創り出すことである。つまり、一人だけ特定の情報について知っていても意味をなさない。誰かと共有して初めて学問知となる。自らの関心に沿って学問知を創り出すために、問いを見つけ、育てる作法や調査研究の作法、ゼミのメンバーと共に議論し高めていく作法、他者を説得する作法、自らの研究行為をふりかえりさらなる課題を見出す作法等について指導する。最終的には卒業論文という独特な世界をつくっていくことになるが、その過程はむしろゼミのメンバーや研究にかかわるその他の人々との協同作業である。

授業計画

第 1 回	イントロダクション	第 16 回	調査内容についての報告と共有①
第 2 回	教育学研究の位置づけと目的	第 17 回	調査内容についての報告と共有②
第 3 回	調査研究の特質と方法①調査とデータ	第 18 回	研究計画書の修正①問いを再設定する
第 4 回	調査研究の特質と方法②問いと方法論	第 19 回	研究計画書の修正②対象と方法の調整
第 5 回	文献報告①フィールドワーク（教材開発）1	第 20 回	研究計画書の修正③先行研究の再調査
第 6 回	文献報告②フィールドワーク（教材開発）2	第 21 回	大学図書館の活用①オンライン調査
第 7 回	研究計画書の作成①研究の問いと仮説	第 22 回	大学図書館の活用②他大学等の調査
第 8 回	文献報告③参与観察（授業研究）1	第 23 回	問いと先行研究の検討①
第 9 回	文献報告④参与観察（授業研究）2	第 24 回	問いと先行研究の検討②
第 10 回	研究計画書の作成②先行研究の調査法	第 25 回	問いと先行研究の検討③
第 11 回	文献報告⑤生活史（教師研究／歴史研究）1	第 26 回	口頭発表と質疑応答の作法
第 12 回	文献報告⑥生活史（教師研究／歴史研究）2	第 27 回	卒業論文構想の発表①
第 13 回	研究計画書の作成③研究の意義と限界	第 28 回	卒業論文構想の発表②
第 14 回	研究計画の発表と今後の課題の共有①	第 29 回	卒業論文構想の発表③
第 15 回	研究計画の発表と今後の課題の共有②	第 30 回	卒業論文執筆に向けて

到達目標

- 研究の意義と特徴を踏まえて、研究計画書を作成することができる。
- 文献購読や他者との議論を踏まえて、教育現象や社会現象に対する調査法について概観することができる。
- 文献報告や自らのテーマの発表を通して、他者と対話する作法を身につける。

履修上の注意

他者やテキストとの対話を通じて、自己の研究関心を明らかにしていきます。一人ひとりの関心や成長が異なることを前提としながら、ゼミ全体での学びや共有の時間を大切にしていきたいと思います。
 なお、大学図書館や学外の施設での調査など教室外での調査の可能性も考慮しておいてください。

予習・復習

基本的には、文献報告や研究計画書に関する調査が予習および復習となる。
 授業外の時間や夏季の時間を中心に、日々少しずつでも調査・研究を進めていきましょう。

評価方法

- 研究計画書：40%
- 報告や発表：40%
- 議論の作法や姿勢：20%

テキスト

テキストや購読文献については、初回の授業で決定したいが、概ね以下の文献を考えている。
 文献：上野千鶴子（2018）『情報生産者になる』ちくま新書。
 岸政彦・石岡丈昇・丸山里美（2016）『質的社会調査の方法——他者の合理性の理解社会学』有斐閣ストゥディア。
 その他の文献については、授業内で適宜紹介する。

授業概要

子どもの特徴に合わせた柔軟な支援や発達援助の知識・技能を身に付けるため、「子どもの行動に影響する心理特性とそれに合わせた関わり」「障害や虐待などの事情により特別な配慮が必要な子どもの理解と支援」などを中心としつつ各自の考えていきたいテーマを検討していきます。専門演習では、ゼミのテーマについてディカッション等により学習しながら、興味のあるテーマを探っていきます。また、卒業論文作成に必要な技能（情報収集の方法、データの獲得方法、論文のまとめ方、プレゼンテーションの方法など）の獲得を目指します。過去の卒業論文では、次のようなテーマがありました。

【テーマの例】

- ・発達障害児・者との接触経験の有無が発達障害のイメージにどのように関連しているか
- ・子どものヒヤリハット場面における大学生の重大さの認識と対策について
- ・大学生における保育者効力感が子どものやる気を促す関わり方に及ぼす影響
- ・自己主張・自己抑制と幼児期の癩癩の関係
- ・保育園・幼稚園での気になる子／障害児への対応について

授業計画

第 1 回	オリエンテーション	第 16 回	春期の振り返り
第 2 回	研究の進め方	第 17 回	研究法の理解（質問紙など）①
第 3 回	子どもの心理発達の理解①	第 18 回	研究法の理解（文献調査など）②
第 4 回	子どもの心理発達の理解②	第 19 回	研究法の理解（その他）③
第 5 回	障害等がある子ども①	第 20 回	研究テーマの検討①
第 6 回	障害等がある子ども②	第 21 回	研究テーマの検討②
第 7 回	配慮が必要な他の子ども①	第 22 回	文献収集と情報整理①
第 8 回	配慮が必要な他の子ども②	第 23 回	文献収集と情報整理②
第 9 回	学習した内容のまとめ①	第 24 回	文献収集と情報整理③
第 10 回	学習した内容のまとめ②	第 25 回	研究方法の検討①
第 11 回	テーマ探し、文献収集①	第 26 回	研究方法の検討②
第 12 回	テーマ探し、文献収集②	第 27 回	研究方法の検討③
第 13 回	ディスカッション①	第 28 回	卒業研究の構想発表①
第 14 回	ディスカッション②	第 29 回	卒業研究の構想発表②
第 15 回	まとめ	第 30 回	まとめ

到達目標

子どもの心理特性や、障害や虐待などの事情により特別な配慮が必要な子どもの特性を踏まえた保育・教育を考えられる。人の学習や行動について科学的に考える視点を持てる。

履修上の注意

- ・協同学習やディカッションなどを行ないませんが、そのような活動が苦手な場合は相談してください。
- ・他者のテーマに関心を持つこと。ディスカッション等では、他者の話を良く聞くこと。
- ・資料作成にはパソコンを使用します。オフィス系ソフト（文書作成、表計算、プレゼンテーション）、インターネット検索などのスキルを身に付けようとする努力は必要となります。
- ・遅刻3回で欠席1回として扱います。また、遅刻・欠席の場合は連絡を入れてください。
- ・施設見学などを行う場合があります。

予習・復習

調査や発表準備・練習のために授業時間外で自主学習が必要となります。

評価方法

発表の内容やどの程度よく伝わるか、各自のテーマの進行状況によって評価します。

テキスト

テキストは指定しません。適宜資料を配布します。

授業概要

初等教育・幼児教育・保育において必ず身につけるべき童話・昔話等の物語によって卒業論文を書く指導を行います。また、理解を助けるために様々な書籍（文学、民俗学、文化人類学、言語学、心理学、社会学など）を読み、研究のための教養を養う指導を行います。

授業は研究発表を中心に行い、それをもとに意見交換・討論・調査などを行い、これに基づいて指導します。図書館・博物館などの外部施設見学も行います。

卒業論文を書く力を養うために、論作文練習の指導を行い、早いうちから各自に課題を出します。

授業計画

第 1 回	オリエンテーション	第 16 回	第二次卒論仮テーマの決定
第 2 回	第一次仮卒論テーマの決定	第 17 回	論作文指導4 章分け
第 3 回	論作文指導1 モチーフ	第 18 回	論作文指導5 概要
第 4 回	論作文指導2 例示	第 19 回	論作文指導6 具体性
第 5 回	論作文指導3 展開	第 20 回	研究の進め方1 まとめ方
第 6 回	研究の進め方1 文献	第 21 回	研究の進め方2 考察
第 7 回	研究の進め方2 ネット文献	第 22 回	研究の進め方3 比較
第 8 回	研究の進め方3 整理法	第 23 回	研究発表5（日本の童話）
第 9 回	研究発表1（世界の童話）	第 24 回	研究発表6（日本の昔話）
第 10 回	研究発表2（世界の昔話）	第 25 回	研究発表7（日本の伝記）
第 11 回	研究発表3（世界の伝記）	第 26 回	研究発表8（日本の実話）
第 12 回	研究発表4（日本の実話）	第 27 回	研究発表9（日本の少年小説）
第 13 回	施設見学1（国際子ども図書館）	第 28 回	施設見学4（東京子ども図書館）
第 14 回	施設見学2（相田みつを美術館）	第 29 回	施設見学5（アンデルセン公園）
第 15 回	施設見学3（ちひろ美術館等）	第 30 回	施設見学6（絵本展）
		第 31 回	施設見学7（国立国会図書館）

到達目標

（春期）第一次仮卒業論文テーマによる論作文指導と研究調査、発表の練習をへて、秋期授業開始時に自分に適し、よりしぼった第二次仮卒論テーマを決定する力をつけます。

（秋期）第二次仮卒業論文テーマによる論作文指導と研究調査、発表の練習をへて、4年生卒業論文授業開始時に、自身にとって最適で意欲がわく卒業論文テーマが決定できる力をつけます。

履修上の注意

授業態度、授業参加度を重視します。授業中に、毎回、研究発表を行い、その内容も評価に含めます。提出物がある時は、提出物も評価に含めます。童話（児童文学）・昔話を中心に多数の様々な書籍を読み研究発表を行うので、地道にコツコツと努力できる人に向いています。無断で発表を欠席した場合は、単位を放棄したものとみなします。

<発表例>ある童話（児童文学）・昔話について、どのような作品（ストーリー等）か、発表者はどのように考えるか、これまでどのような評価を得てきたか、教育の現場ではどのように読まれてきたか、どのように絵本化されているか、最もすぐれた絵本はどれか、子どもはどのように受容するか、などです。

これ以外に、卒論準備のために早いうちから各人に適した課題を出します。

予習・復習

研究発表を中心に行いますので、調査したり考察したりまとめたりする作業は、授業内だけでは不十分ですので、事前の自主学習が必要となります。また、研究発表の際に提示された問題点等を解決するための復習も必要となります。

評価方法

授業態度、授業参加度、研究発表、提出物（レポート等）

研究発表 40% レポート 40% 受講態度 20%

テキスト

教材・参考書等は、授業中に指示します。

授業概要

この演習は「卒業研究」の前段階として、造形表現の発達段階と特性を理解するとともに、子どもの造形活動の指導・支援に必要な基礎的知識と技能を幅広く身に付けることを目指す。また保育・教育の造形指導者として、子どもの要求にふさわしい援助を与えるための指導の研究と、豊かな表現を促すための材料・用具等の取り扱いについて、製作体験を通して学習していく。

授業計画

第 1 回	材料経験の内容と方法 ①平面表現(素描, 水彩, 絵本づくり)	第 16 回	創造力を育てる遊具
第 2 回		第 17 回	・仕掛けのあるおもちゃ(木のおもちゃ, 玩具など)
第 3 回		第 18 回	・大型遊具のデザイン
第 4 回	②立体表現(紙工作, 粘土型取り運動 会メダルなど)	第 19 回	マルチメディアを用いた映像表現 (クレイアニメ, ライトファンタジー)
第 5 回		第 20 回	
第 6 回	学外活動—美術館鑑賞—	第 21 回	海外の子どもの造形表現(欧州南米)と 鑑賞教育(障がい者アート他)
第 7 回	材料体験の内容と方法	第 22 回	
第 8 回	③伝承の遊び(飛び出すしかけ絵本, 折り紙, お便りカード)	第 23 回	学外活動:親子を対象とした造形ワーク ショップ(造形遊びの発展)
第 9 回		第 24 回	
第 10 回	幼・保・小学校の連携と総合的な活動(紙 芝居, パネルシアター, ペープサート, 影絵など)	第 25 回	研究課題:模擬保育・指導計画の設定→ 製作活動の導入→展開→まとめ, 評価と 反省会
第 11 回		第 26 回	
第 12 回	乳幼児~小学校児童画の見方 —発達段階による様々な表現—	第 27 回	
第 13 回		第 28 回	
第 14 回	課題発表	第 29 回	
第 15 回		第 30 回	

※学芸員による学校鑑賞教育と公共施設にて親子を対象としたワークショップの学外活動を予定。

到達目標

- ・材料をもとにした造形活動を楽しみ豊かな発想をするなどして、自らの造形表現を高める。
- ・教育・保育者としての造形活動を指導・支援する為の知識や、基礎となる技能を習得する。
- ・研究テーマを設定して、継続的(次年度4年次)に研究計画を遂行する能力を養う。

履修上の注意

課題に対して主体的な取り組みを心掛け、地道な努力の積み重ねを目指す。手先の器用さよりもむしろ時間をかけた丁寧さと根気強さが求められる。教員・学生同士との対話的で深い学びを目指す。

予習・復習

造形の実践力を高めるために、公立美術館・公共施設等を利用したワークショップ、学園祭などの参加を検討。ファシリテーター(促進者)として、子どもとの関わりを持つ場面に積極的に参加(材料集めなども含む)することを望む。

評価方法

課題に取り組む態度、製作した作品の質と量(50%)、ゼミ単位でのワークショップ・ボランティア活動(30%)、製作レポートの内容(20%)により評価する。

テキスト

必要に応じて資料を配布する。